

## 1 研究主題

一人一人の未来を見据えたインクルーシブ教育  
～支援体制づくり・授業づくりを通して～

## 2 研究主題の設定理由

### (1) 今日の課題から

インクルーシブ教育とは、子どもたちを包摂する、包み込む教育であり、誰一人も排除しない教育である。2012年文部科学省から出された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」では、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点での教育的ニーズに最も確に答える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要である。基本的な方向性としては、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感、達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である。」と報告されている。

### (2) 学校教育目標との関連から

本校の教育目標は、「考える子」「たくましい子」「思いやりのある子」である。学習において生活において、友達と課題解決のために深く考え協働すること、共に粘り強く取り組むこと、相手を思い協力し助け合うことは、一人一人の未来につながる大切な学びであることから、本研究主題は、学校教育目標と深く関わるものと考えられる。

### (3) 本校の実態から

本校では、特別支援学級に在籍している児童の他に、通常学級の中で学力面や生活面において、本人に困り感のある、個別に支援が必要な児童もいる。先生方からも、インクルーシブ教育や特別支援教育への知識不足、一斉指導の難しさ、支援が必要な児童もそうでない児童も夢中になる授業づくりについてなど、教育活動全体を通して多くの難しさや困り感があるとの声が聞かれた。

そこで、令和3年度より、学校課題を「一人一人の未来を見据えたインクルーシブ教育～支援体制づくり・授業づくりを通して～」とし、支援が必要な児童の5年

後10年後を見据え、生活や学習の中で生きて働く力を確実に付けていきたいと考えた。

研究のスタートとなった令和3年度は、まず、支援を必要としている児童の児童理解から始めた。その児童が何が困り、何を必要としているのか、どういった手立てが必要であるのかをしっかりとわたしたち担任や教職員が捉えたいと考えた。また同時に、わたしたち教職員が、インクルーシブ教育について理解を深め、支援が必要な児童を学習面や生活面において、どのような支援体制が考えられるのか、授業や環境づくりではどのような取組が考えられるのか研究を進めた。分かりやすい授業や生活面への丁寧な働きかけは、支援が必要な児童はもちろんであるが、通常学級児童にとっても、確実にプラスになるはずであると考え、すべての子どもを学校全体で支え、できるだけ同じ場で共に学ぶことを追求する多様で柔軟な支援体制づくり、授業づくりを研究した。

研究を支える柱として、大きく3つを挙げることができる。

- ①「視覚化」
- ②「交流」
- ③「雰囲気づくり・個別の対応」

1つ目の「視覚化」とは、職員誰もが児童にとって分かりやすいことを意識したことである。授業の流れをパターン化し、短い指示や分かりやすい板書を心がけた。デジタル教材や番組、タブレットの使用や具体物などを意識して用いるようにした、児童が学習場面や生活場面で成果が見てとれるカードを使用するなど自己肯定感や成就感をもてるように意識したことである。2つ目の「交流」とは、授業の中で児童同士の学び合いを大切にしてきたことである。児童同士の学び合いの中から「分かる」を目指していった。そのためにも、自分の考えをもつ時間や整理する時間を大切に確保した。3つ目の「雰囲気づくり・個別の対応」とは、学校に来られない児童も保健室登校児童もあすなる学級児童も、誰もが学級の一員であるという雰囲気づくりを各学級とも努めたことである。そして、授業の中では、間違っても大丈夫、分からなくても大丈夫という安心、そして温かな雰囲気づくりに努めたてきた。ただ、研究を進めていく中、課題も挙げられた。成果の2つ目の「交流」であるが、なかなか児童同士の学び合いが難しいという実態、場合もあった。3つ目の「雰囲気づくり」にも関係するが、「よい学びの雰囲気づくり・意欲づくり」として、なかなか学びに向かえない児童をどう向かわせるか、児童が意欲や興味をもって取り組める働きかけやしかけを研究したいということ、そして、「体制づくり」である。担任とT Tの効果的な連携、担任以外の先生の朝の活動への配置など、学校全体で配慮が必要な児童もそうでない児童もすべてを包み込むために考えていかなければならない課題が出てきたのである。

今年度は研究の3年目となり、研究を深め、まとめる年度となる。まず、これまでの成果を赤羽小のインクルーシブ教育のスタンダードとし、特に課題となっている点について、更に研修を深めていきたい。

- ①「児童誰もが分かる」視覚化の推進
- ②「分からないことから始まる授業」日々の授業や校内研究授業の実践

- ③インクルーシブ教育を研究している学校との交流
- ④学びが深まる広がる「交流」の在り方の研修
- ⑤ミニハート相談会（小規模ハート支援委員会）の実践
- ⑥自己表現力やコミュニケーション力向上の一助としてのミムの実施

ただ、学級の実態に応じて、意識しなくてはならない点は異なるはずであるので、担当する学級の実態に合わせて、日々の学習場面や生活場面で研究を進めていくことにしたいと考えた。

### 3 研究の方針

- (1) 一人一人の未来を見据えたインクルーシブ教育という視点で、この日この時間での学びを大切にするという、全職員の共通理解のもと、全校体制で研究を行う。
- (2) 研究課題解明のために、目指す児童像を明らかにし、研究の目標を明確にする。
- (3) 日々の実践を積み上げていく中で、児童の変容を的確に捉え、その成果を確認しながら研究を推進する。
- (4) 学力向上推進リーダー派遣事業との関連を図り、関係諸機関からの指導助言を受け、さらに先進校の研究を生かしながら、研究を推進する。

### 4 研究主題の捉え方

**一人一人の未来を見据えたインクルーシブ教育**  
～支援体制づくり・授業づくりを通して～

- (1) **一人一人の未来を見据えたとは**  
子どもたちは、いずれ学校を離れ、親を離れ、社会へ出て自立していかなければならない。その自立こそが、一人一人の未来であると考え。わたしたちは、その自立した未来の児童の姿をしっかり念頭に置き、大切に研究を進めていかなければならない。
- (2) **支援体制づくり・授業づくりとは**  
児童が将来自立したとき、生きて働く力を付けておけるよう、校内の支援体制を明確にすること、そして、担任としてできる支援・分かりやすい授業を研究することを全教職員で共通理解の上で行っていくこと、継承していくことと考える。

## 5 目指す児童像

学校生活を楽しみに登校し、認め合い、支えあう子ども

## 6 研究の仮説

下記の視点で教育活動や授業を実践すれば、目指す児童を育成することができるだろう。

赤羽小のインクルーシブ教育のスタンダード

- ① 視覚化（職員誰もが分かりやすいを意識すること）
- ② 交流（児童同士の学び合いを大切にすること）
- ③ 雰囲気づくり・個別の対応

<視点1 児童>

- ・ 友達や先生との関わりの中で、自己肯定感を高めることができているか。②③
- ・ 学習や生活の中で、生き生きと活動に取り組んでいる時間があるか。①

<視点2 教師>

- ・ 教育活動全体を通して、支援を必要としている児童の児童理解に努め、よい学級の雰囲気づくりに努めているか。③
- ・ 支援を必要としている児童を意識した授業づくり、授業改善をしているか。①②

## 7 研究内容・計画

(1) 「分からないことから始まる」授業づくり

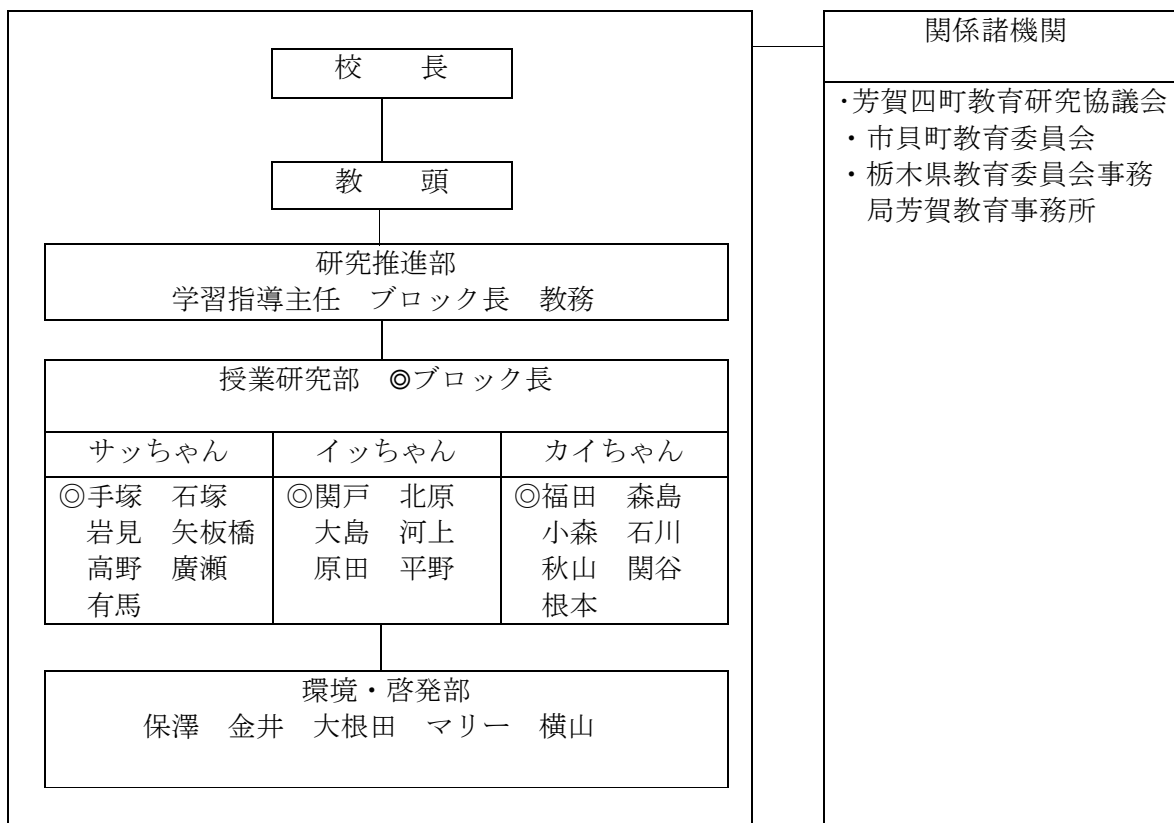
- ① 生き生きと活動を行う取組の工夫
  - ア 学習課題設定の工夫（導入の工夫）
  - イ ユニバーサルデザインを取り入れた教材教具の工夫
  - ウ ICTを活用した一人一人の活動の場の確保
- ② 自己肯定感を高める取組の工夫
  - ア 一人一人の考えやよさを認め合う場の設定
  - イ 学びの振り返りの工夫
  - ウ 学習指導助手、特別支援学級との連携

(2) 児童を支える居心地のよい学級づくり・支援体制づくり

- ① 成就感や達成感を味わう取組の工夫
  - ア 支援体制の整備
    - ・ 個別の教育支援計画や指導計画の充実
  - イ 支援を必要としている児童の児童理解

- ウ 教室環境づくり
- エ 係活動や当番活動など学級集団への役割の遂行
- オ 児童主体型の行事等の計画
- カ 家庭との連携・信頼関係の構築
- キ 共遊への取組(共遊の実施)

## 8 研究組織



## 9 研究予定

期 日	項 目	内 容
4月	研究課題研修	・研究推進計画・研究内容の説明と確認
5月	研究課題研修	・配慮児童の情報の共有 ・ミニ研修 ・研究授業へ向けての指導案検討会
6月	研究課題研修	・第1回研究授業及び授業研究会 →前宇都宮大学大学院教育研究科教授 松本先生来校
7月	研究課題研修	・ミニ研修 ・スキルアップ研修：実践校の取組や講話
8月	学習指導委員会 研究課題研修	・学力調査問題の分析 ・スキルアップ研修：特別支援学級担任の学級運営 ・研究授業へ向けての指導案検討会（合同訪問）

9月	研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回研究授業及び授業研究会</li> <li>→前宇都宮大学大学院教育研究科教授 松本先生来校</li> <li>・研究授業へ向けての指導案検討会及び準備(合同訪問)</li> </ul>
10月28日	研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合同訪問</li> </ul>
12月	研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニ研修</li> </ul>
1月	学習指導委員会 研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力テスト結果分析</li> <li>・研究授業へ向けての指導案検討会</li> </ul>
2月	研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回研究授業及び授業研究会</li> <li>→前宇都宮大学大学院教育研究科教授 松本先生来校</li> <li>・ブロック情報交換研修</li> </ul>
3月	研究課題研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本年度のまとめ・次年度の研究計画</li> </ul>